

国際学会報告

日本と台湾の客家研究者の国際交流

小林 宏至

(こばやし ひろし)

人文学部准教授

わたしは中国東南部を中心に世界的なネットワークをもつ客家(はっか)というエスニックグループを主たる研究対象としてきた。ここ数年、客家を研究対象としてきた日本人研究者と台湾の学術機関との国際交流が盛んに行われており、これらのプロジェクトにわたしも係わらせてもらっている。

2018年は日本の国立民族学博物館が主催するシンポジウムに参加し報告を行った。2018年12月15日から2日間、国立民族学博物館にて一般公開という形をとって、国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象——華僑華人の拡がり」として開催された。翌2019年、今度は台湾の交通大学がホスト校となり、10月5日、6日にかけて「百年往返」というテーマで客家研究シンポジウムが行われた。これらの研究成果を通して、(特に台湾を中心とした)客家研究と日本人研究者がどのような研究史上の関係を築いてきたかが確認され、この成果は書籍として台湾の南天書局から出版される運びとなった。

わたしはシンポジウム初日に、土楼という客家の民間建築に対して日本の建築学が果たしてきた役割を報告したわけだが、実は当日、冷や汗をかく場面に見舞われることとなった。それはシンポジウムにて、各々の研究者の発表を聴いていた時である。ふと気づくと発表者は皆、中国語を繁体字(主に香港や台湾で使用されている漢字)で表記していたのであった。しかし、わたしは大陸中国での発表や調査が多いため、今回の会場が台湾であることを失念しており、文字はすべて簡体字(主に大陸中国で使用されている漢字)で準備してしまっていた。「しまった!」と思いつつも既にシンポジウムは進んでおり、簡体字を繁体字に修正する時間はなかった。

折しも大陸中国と台湾は、政治的な面で緊張関係が報じられることもあり、わたしが簡体字を用いて発表することに対して、何か政治的な意図をくみ取られてしまうのではないかと、発表が近づくにつれ徐々に不安になってきた。そしてわたしの発表の順番になったわけだが、冒頭、「すみません、わたしはいつも中国で発表することが多く、パワーポイントの文字も簡体字で書いてしまいました。ただ、そこに特別な意味はありません」と(南方訛りの中国語で)話し始めた。すると会場からは冷やかな目で見られるかと思いきや、笑いが起き、笑顔の聴衆を前に発表を始めることができた。わたしは胸をなでおろし、発表を進めた。



国立民族学博物館での会議

シンポジウムは成功裡に終わり、翌6日は交通大学が用意してくれた新埔市街文化を巡るエクスカージョンに参加した。台湾の客家委員会による文化財や景観の保護は、強引な経済開発や観光資源化といったものではなく、緩やかな保全運動となっており、夕暮れ時に歩いた街並みは実にノスタルジックで、人為的・計画的に創りだすことのできない美しさがあった。2020年から現在にかけても、南天書局から出版予定の書籍などを通して関係が続いている。国立民族博物館(当時)の河合洋尚先生、客家文化発展センター主任の何金樑先生、南天書局の魏徳文先生にはこの場を借りて心より感謝を申し上げたい。



シンポジウムのテーマが記載された名札



台湾交通大学でのシンポジウムの様子